

宮崎市立大塚中学校の学力向上への取組

1 学校の概要

本校は宮崎市のベッドタウンとして急速に人口が増加した地域にあり、開校数年来、1000人を越える大規模校であったが、現在では少子化の影響により生徒数が減少し、全校生徒数が654名の学校である。全体的には教育に関心の高い保護者が多いが、価値観や家庭の状況も多様化し、いじめや不登校、思春期特有の非行問題行動についても本校の課題の一つでもある。

2 生徒の実態

生徒は素直で明るく、生徒会活動をはじめボランティア活動に意欲を持って取り組む生徒も多い。部活動においても熱心に取り組み、大会等では好成績を収める部活動も多い。授業においても、集中した態度が多く見られ、進んで発表する姿勢が身に付いている。特に最近では、全般的に研究の成果が出てきており、学習に対する意欲や取組が顕著に見られるようになってきている。

3 学力向上に向けた経営方針

本校では、「心豊かで創造力のあるたくましい生徒の育成」という目標を掲げ、そのねらいの具現化に努めてきた。例えば、基礎的・基本的事項の指導の徹底や、個性や能力を生かす指導の充実、さらに郷土愛を基盤としながら日常の社会規範を遵守する態度や、生命を尊重し他人を思いやる心の育成などを通して、心身ともに調和のとれた人間の育成を目指してきた。特に平成14年度から3年間、文部科学省より「学力向上フロンティアスクール」の指定を受け、3年間の研究において学習指導要領の目指す「確かな学力」の向上に資することができた。

4 教育課程内の取組

(1) 研究主題

確かな学力を身に付け、新しい時代を切り拓いていく生徒の育成

～生徒一人一人の能力や個性に応じたきめ細かな指導と評価の一体化の工夫を通して～

(2) 研究内容

- ① きめ細かな学習指導と評価の一体化の工夫（必修教科，選択教科）
- ② 少人数学習指導の工夫

(3) 具体的な研究内容

① 自己評価を取り入れた単元ガイダンスの充実

ア ねらい

- 授業を改善する。
 - ・生徒に学習の見通しをもたせる。
 - ・授業の目標を明確にする。
 - ・きめ細かな指導に生かす。
- 形成的評価に役立てる。
- 生徒の自己評価する力を育てる。

イ 単元ガイダンスの進め方

(ア) 自己評価表の評価への生かし方

すべての教科の自己評価表に記述欄を設けて、関心・意欲・態度の評価に役立てる。

(イ) 自己評価する力の育成

単元テストの結果と比較させながら、教師のコメント欄を設けていく。

【自己評価表の例】

社会科 自己評価表

☆ 1時間の授業を終えたら【 】にA B Cで目標に対する評価を自分で書き入れていきましょう。

月	大単元	中単元	学習内容	観点別評価の視点【評価の記入】			
				関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
9月・10月	第5章	明治維新と近代	単元の目標	明治政府の政策や自由民権運動について関心を持ち、意欲的に調べ、身近な地域における明治維新や文明開化にまつわることを調査しようとする。	明治政府の近代政策から、そのねらい・効果を考えることができ、自由民権運動から憲法制定までの時期について、様々な立場に立つた主張を考えることができる。	政策の内容や明治政府のねらいについて、多様な資料から読み取り、まとめることができる。	新政府の政策の内容について、そのあらましを理解することができ、自由民権運動のおこりから議会政治開始までの経過や議会政治の意義を理解することができる。
			1新政府の設立 (P122～123) (1)	新政府の政策について、意欲的に追究できたか、【 】	自己評価の結果を振り返ることで、できなかった内容などを家庭学習で改善させる。		明治新政府の様々な改革の内容やねらいを説明することができたか、【 】
			2維新の三大改革 (P124～125) (1)		新政府の政策について、民衆の立場で明確なものかどうか決め、その理由を言えたか、【 】		富国強兵政策の内容を理解し説明できたか、【 】
			3文明国をめざして (P126～127) (1)	この評価の視点をもとにして、単元テストを作成していく。	幕府の変化を幕府と比較して表すことができたか、【 】	産業や文化に関して、新政府が行なった政策を説明できたか、【 】	
			4近代的な国際政府の行った外国との取				政府の行った外国との

② 単元テストの効果的な活用

ア ねらい

生徒が学習に生かすための評価を学習活動の中に取り入れていくことが重要であると考え、生徒自らが自分自身の到達状況を把握するための評価法として、自己評価表や単元テストが有効な評価法であるとして取り組んでいる。

イ 実施方法

全教科、単元終了後に実施しており、総括的評価として評価していくことを共通理解し、実施している。

③ 授業研究

授業の視点を、

- ・努力を要する生徒及び十分満足する生徒への手だて
- ・評価を指導に生かせる指導案
- ・授業改善につながる自己評価表

の3点として、全員の職員が指導案を作成し、研究内容を生かした授業の実践を行い、授業改善に努めた。

④ 選択教科におけるきめ細かな指導の工夫

生徒の多様な要求に応じるために多くのコースを開設した。基礎的・基本的な学習内容を定着させるための「補充的な学習」を重視していくコースだけではなく、興味・関心や

理解力が高い生徒に対応するために、必修内容よりさらに進んだ発展的コースも開設した。

コースや生徒の実態に応じた努力を要する生徒への手だてのモデル化を行い、学び合い学習による小集団学習などを実践し、指導過程の工夫改善（補充・発展）との共有化を図った。

【選択教科のコース数】

教科名	2・3年生 生合同	3年生	1年生	教科名	2年生	3年生
国語	3	4	2	音楽	2	2
社会	2	4	2	美術	1	1
数学	4	4	2	保体	2	3
理科	3	4	2	技・家	2	2
英語	5	4	2			

多くのコース開設

特に2・3年生合同のコースでは、多くのコースを開設するとともに、異学年集団の学習により学び合いなどが深まり、生徒の多様なニーズに応えることができた。

⑤ 習熟度別少人数学習指導の工夫

本校では数学科と英語科において習熟度別少人数指導を実施している。それぞれのコースできめ細かな指導ができるよう、以下のような取組を実施している。

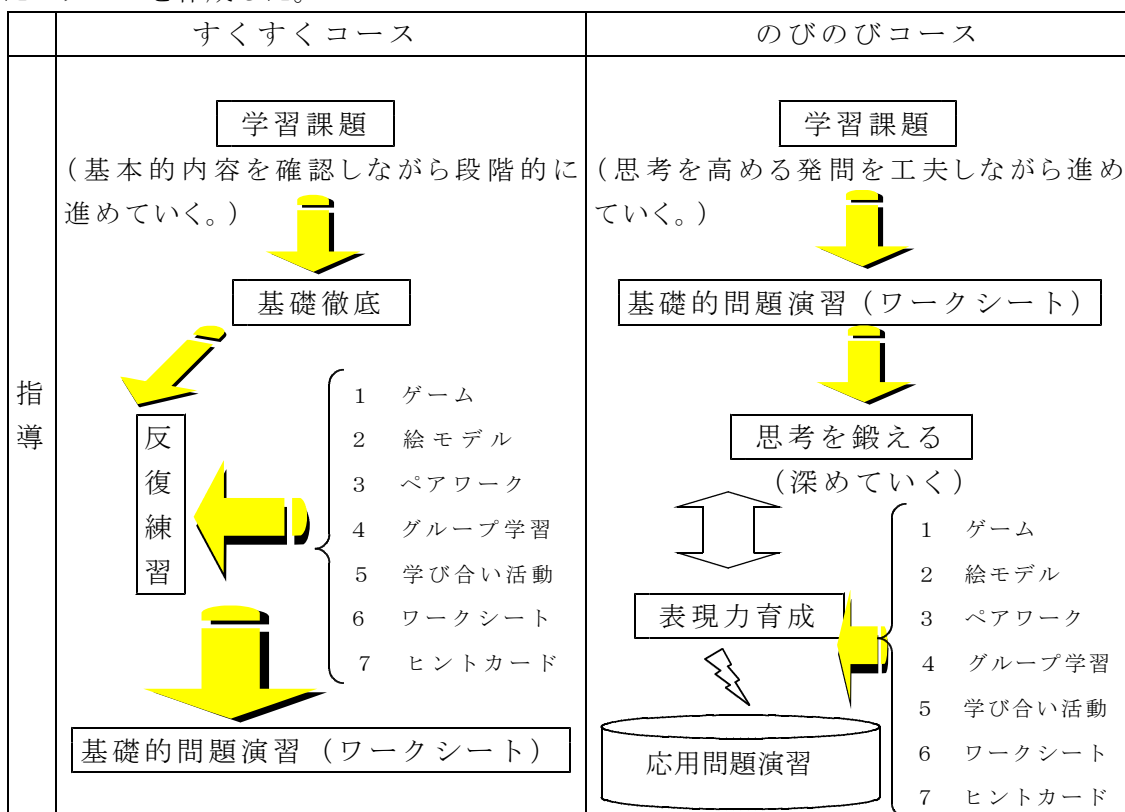
ア クラス編成の工夫

教師がそれぞれのコースの内容のガイダンスを自己評価表等（①ーイ）を使いながら行い、アンケートを実施し、生徒の希望と習熟度によってコース決定を行った。

また、生徒のコース間の移動を可能にするためにコース変更のガイダンスも行った。

イ 指導過程の工夫

それぞれのコースで、学習課題を同じ指導過程に設定するのではなく、コースに適したパターンを作成した。



5 教育課程外の実施

(1) 夏季休業中の三者面談

下記のようなねらいで、全校生徒を対象に三者面談を行っている。

- 7月までの家庭及び学校生活の様子や学習状況を三者で振り返り、夏季休業中に充実した生活を送れるよう生徒の意識を高める。
- 保護者との信頼関係を築く。
- 学校や学年、学級に対する保護者の願いを把握するとともに、今後の指導に役立てる。

(2) サマースクールの実施

夏季休業中を利用して、下記のねらいでサマースクールを実施している。

- 基礎的・基本的な内容の定着を図る。
- 「C」評定段階の生徒を「B」段階まで伸ばす。
- わかる喜びを味わせるとともに学習意欲を高める。

6 保護者・家庭・地域との連携

(1) 学力向上推進委員会へのPTAの参加

保護者も積極的に家庭学習の支援ができるように研究の内容などを家庭に伝える工夫をする。そのため、毎月実施されている校内の学力向上推進委員会に保護者の代表を必ず参加してもらい、委員会の協議内容についてPTA日より「スクラム」を通じて保護者全体に広めるようにしている。

7 成果と課題

(1) 成果

- ① 学習前のガイダンスの充実によって学習活動の意義を理解させることができた。また、生徒の思考の流れを指導者が意識することによって、生徒一人一人の能力や個性に応じた指導を展開することができた。
- ② 年間指導計画や自己評価表などにより評価の視点を明確にすることで、指導内容が精選され、指導と評価の一体化を実現でき、各種学力調査、生徒へのアンケート調査、評価・評定の結果等を年々向上させることができた。
- ③ 自己評価表を活用し、指導と評価の一体化を目指したことで、生徒は学習の見通しをもてるようになった。また、つまづきの内容や原因に気付くこともでき、家庭学習を活性化させる手立てとなった。
- ④ 保護者へ評価方法や学力向上の取組を説明したことにより、家庭との連携をさらに進めることができた。

(2) 課題

- ① 必修教科と選択教科との関連性を分析して、さらに学力の定着を高めていく。
- ② 学力を向上させるための手立てを様々な視点から講じてきたが、それを継続して実践していくためには、教科会など職員間の理解の徹底を図るとともに、より効率的なシステムを生み出す職員側の時間確保が必要となってくる。
- ③ 全校生徒に確かな学力を身に付けさせるには、保護者との連携をさらに密にしながら、学力向上の手立てを具体的に図り、より一層開かれた学校づくりを目指す必要がある。